

平安時代和文における嫌悪の 心情形容詞「いとはし」「うとまし」

世 羅 惠 巳

一、はじめに

人に道心が起こる経緯について、「源氏物語」橋姫巻に次のような八宮の言がある。

よのなかをかりそめのこと、おもひとり いとはしき心のつき
そむる事も わかみにうれへあるとき なへての世もうらめ
しう思ひしるはしめありてなん 道心もおこるわさなめるを

〔源氏物語・橋姫一五二七—六〕〔源氏物語大成〕

八宮は、苦悩や社会的不遇を契機として人には道心が起こるとしており、道心と関わりのある語として「いとはし」がみえる。この「いとはし」という語は、用例(a)のように人が出家の志を抱く場面においても用いられている。

(a) (桐壺院崩御後) かくおほかたのよにつけてさへ わつらはし
うおほしみたる、ことのみまされば (源氏八) もの心ほそく
世中なへていとほしうおほしなる、に さすかなることお
ほかり 〔源氏物語・花散里三八七—三〕

桐壺院の亡き後、政治情勢は一変し、権力を握った弘徽殿側から
圧力を受ける源氏は社会的不遇の状態にある。そして、この現状を
「いとはし」いものとして嫌悪し、出家を志している。しかし、源
氏と同じく社会的不遇の状態にある藤壺が出家を決心する用例(b)に
おいては、「いとはし」ではなく「うとまし」が用いられている。

(b) (桐壺院崩御後) よろつこと ありしにあらすかはりゆく世
にこそあめれ 戚夫人のみけむめのやうにはあらすとも かな
らす人わらへなる事はありぬへき身にこそあめれ など (藤壺

〔表1〕対象文献と用例数 一覽

文献名	各語	いとはし	うとまし
宇津保物語		1	3
大和物語			1
枕草子			3
源氏物語		18	43
紫式部日記		2	
堤中納言物語			1
夜の寝覚		5	16
浜松中納言物語		2	9
狭衣物語		2	7
大鏡			1
讃岐典侍日記			1
とりかへばや			3
合計		30	88

ハ) 世のうとましくすくしかたうおほさるれば、そむきなむ
 ことをおほしとるに
 〔源氏物語・賢木三五四一八〕

用例(a)(b)は、心情の主体者である源氏と藤壺の置かれた状況(社会的不遇)や嫌悪の対象(世中・世)は同様であるが、異なる二語「いとはし」「うとまし」が用いられている。この二語により表わされた心情には、どのような差異が存するのであるか。そこで本稿では、平安時代和文を対象とし、嫌悪の心情形容詞「いとはし」「うとまし」により表わされた心情の差異について明らかにすることを試みる。

〔表1〕に、対象文献名(ただし、韻文は除く)と用例数を一覽する。

なお、資料中に掲げた用例における傍線や波線、() による補足、空白は、理解の便宜をはかり、私に付した。用例末には、文献名と巻数、頁数、行数を記載した。

二、「いとはし」「うとまし」における

拒否の様相

嫌悪とは、心情主体者(以下、「主体」と称す)にとつて望ましくない刺激を拒否する心情である。二語における主体はどのような様相をみせるのであろうか。なお、「望ましくない刺激」は主体に心情を誘発する要因であるため、以下「要因」と称す。

① 二人御帳の後に居隠れたるを、(深酔ノ道長ハ)取り拂はせ給ひて、二人ながら捕へすゑさせ給へり。「和歌一つ宛仕うまつれ、さらばゆるさむ」とのたまはず。(私ハ紫式部ハ)いとはししく恐ろしければさこゆ。(紫式部日記・八八一九)

② (裳上死後)うしとおもひしみにし世もなへていとほしうなり給てか、るはたし(夕霧)たにそはさらましかはねかはしきさまにもなりなまし」と(源氏ハ)おほすには〔源氏物語・葵三〇六一〇〕

③ (私ノ寢覚ハ) 一つ方 (|| 帝ノ懸想) の、うとましく、ゆ、しう
 おほえしにより、とく百敷をいでんよすがにこそ、(内大臣ニ)
 なごりなくうち靡ききこえしに 「夜の寢覚・卷4二七〇—七」
 ④ (狭衣ノ懸想方) うとましう心憂きに、(源氏宮ハ) 神の御方
 さま (|| 齋院就任) はうれしう、おほし急がれて、(狭衣ノ懸想
 ヲ) 露ばかりも見知らぬさまにもてなさせ給へる 「狭衣物
 語・卷2一九七—八」

用例①②は「いとほし」、用例③④は「うとまし」の用例である。
 要因を受けた主体は、どのような状況に置かれているのだろうか。
 用例①の主体紫式部は道長から歌を強いられ、用例②の主体源氏は
 葵上の死を受け入れざるをえない。用例③の主体寢覚は帝から一方
 的に懸想され、用例④の主体源氏宮は、同腹の兄妹のように育つた
 狭衣からの懸想に困惑させられている。これらの用例より、主体は
 いやおうなしに要因を受けとらざるをえない状況に置かれているこ
 とがわかる。

さらに、これらの要因に対する主体の反応に着目すると、用例①
 ④の要因に対して各主体は、拘束から解放されるために歌を詠み②、
 出家を志し③、宮中からの退出を望み③、齋院就任を心待ちにす
 る④という、回避の反応をみせている。これは、受けとらざるを
 えない要因に対して、主体が対立的な態度をとれないことによるも

のと思われる。そのため、主体は要因に対して従属的立場にあるも
 のと思われる。

なお、この要因と主体の関係は「いとほし」「うとまし」の全用
 例に該当していることから、「いとほし」「うとまし」の主体は、回
 避という方法により要因を拒否していることがわかる。

三、「いとほし」「うとまし」における

要因と対象

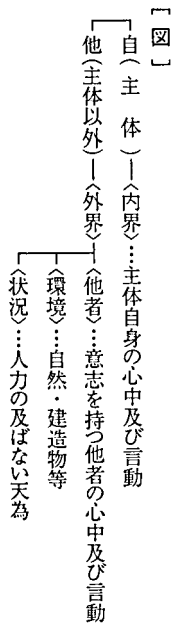
心情は、要因を受けた主体が発するものであるため、要因の質的
 な差異は発生する心情と関連しているものと推測される。そこで、
 要因発生に対する責任の所在に関わる要因発生源(以下、「発生源」
 と称す)について検討する。また、要因だけではなく心情の対象に
 も着目して分析を行なう。

ここで、発生源と対象の例を提示しておく。両者は同一となる場
 合もある。

(α) (発生源(状況) 紫上ノ死後) (主体) 源氏ハ (対象(状況) 世中お
 ほしつ、くるにいと、いとほしくいみしければ …中略:
 か、るかなしさのまされに むかしよりの御ほい (|| 出家) も
 とけてまほしくおもほせと (源氏物語・御法一三九四—四)
 (β) (発生源・対象(他者) 飛鳥井女君乳母ノ) 火影の姿つき、又知
 らずいやしきも、(主体) 狭衣ハ (|| 出家) うとましうて、「思えな

き人來たる」とて、(私Ⅱ狭衣ヲ)うちもこそすれ。…」
 「狭衣物語・卷一七〇—」

発生源や対象は、主体がどのような存在として要因をとらえてい
 のかを反映すると考えられる。そこでまず、心情を発する主体を
 中心として、「いとはし」「うとまし」の全用例における発生源がど
 のように位置づけられているのかという観点から調査検討を行なっ
 た。その結果、発生源が主体自身である「内界」、主体以外の人間
 である「他者」、自然や建造物に関わる「環境」、人力の及ばない天
 為である「状況」の四つに分類できる。これらは「図」のような関
 係性にある。



なお、対象に関してもこの分類は適用できると考えられる。そこ
 で、発生源と同様に対象についても分類を行なった。分類の結果は
 「表2」「表3」に示した。

「表2」「表3」より、「いとはし」「うとまし」は、発生源も対象
 も異なる様相を見せている。

「表2」「いとはし」の要因発生源と対象 全30例

要因発生源 \ 対象		〈内 界〉	〈外 界〉			合 計
			〈他 者〉	〈環 境〉	〈状 況〉	
〈内 界〉						0
〈外 界〉	〈他 者〉		3(10.0)	1(3.3)		4(13.3)
	〈環 境〉			1(3.3)		1(3.3)
	〈状 況〉	7(23.3)	1(3.3)	1(3.3)	16(53.4)	25(83.4)
合 計		7(23.3)	4(13.3)	3(10.0)	16(53.4)	30(100.0)

(注) 表中の数値は用例数、()内は%

「表3」「うとまし」の要因発生源と対象 全88例

要因発生源 \ 対象		〈内 界〉	〈外 界〉			合 計
			〈他 者〉	〈環 境〉	〈状 況〉	
〈内 界〉		5(5.7)				5(5.7)
〈外 界〉	〈他 者〉		64(72.7)		4(4.5)	68(77.2)
	〈環 境〉			12(13.7)		12(13.7)
	〈状 況〉	1(1.1)			2(2.3)	3(3.4)
合 計		6(6.8)	64(72.7)	12(13.7)	6(6.8)	88(100.0)

(注) 表中の数値は用例数、()内は%

まず、「表2」「表3」から看取できる発生源の状況に関して概観する。「うとまし」には、すべての発生源に対して用例が存在するが、「いとほし」においては〈内界〉のみ用例が確認できない。これは、「いとほし」において主体は発生源とならないことを示している。また、「いとほし」の用例では〈状況〉が八割強を占め、「うとまし」の用例では〈他者〉が約八割を占めるという、各語において最も高い割合を示す発生源が異なる点も注目される。対象においても、「いとほし」では〈状況〉が、「うとまし」では〈他者〉がそれぞれ最も高い割合を占めている。そのため、「いとほし」は〈状況〉と、「うとまし」は〈他者〉と強く結びついており、深い関連性を有すると推測できる。

また、「表2」「表3」から看取できる発生源と対象の関係性についても、二語は異なる様相をみせる。「いとほし」において注目されるのは、用例⑤⑥のように、対象の差異に関わらず発生源を〈状況〉とする傾向がみられる点である。

⑤「右大将・侍従（＝仲忠）、ひとつ（重）に奉りて、おり給しこそ有難く見えしか。そが中にも、侍従を見給へしこそ、常は厭はしき」〔発生源〈状況〉／対象〈他者〉〕女このよき、ほしかりしか〔と（正頼ハ）の給 〔宇津保物語・祭の使四二一一〕〕

⑥（私）浮舟ハ〔発生源〈状況〉〕猶よつかすのみ つるにえとまる

ましく思給へらるゝを あまになさせ給てよ〔発生源〈状況〉世中に侍とも 例の人にてなからふへくも侍らぬ身になむと（僧都二）きこえ給：中略：（浮舟ハ）かゝるかたちありさまを なとて〔対象〈内界〉〕身をいとほしく思はしめ給けん 物のけもさこそいふなりしかと（僧都ハ）思あはするに（源氏物語・手習二〇二八―一八）

それに対して「うとまし」では、用例⑦⑧のように発生源と対象を同一とする傾向がみられる。

⑦（某院ハ）いといたくあれて 人めもなく はる／＼とみわたされて〔発生源・対象（環境）〕こたぢいと／＼とましくものふりたり〔源氏物語・夕顔二二〇―一八〕

⑧（女中納言ハ）たゞ人がらのいとをかしくすぐれて、うとまし〔発生源・対象〈他者〉〕もてなしもなく、たゞあはれげにうち語りつ、（四ノ君ハ）見馴るまゝには、（女中納言ヲ）思ひもおとされたまはさりけり。「とりかへばや・上二〇―一六」

これらの差異は、二語により表わされた心情の本質的な差異に関わるものと推測される。以上をふまえ、各語について具体的な分析をすすめる。

三——「いとはし」について

「いとはし」では、発生源を「状況」とする用例が八割強を占めていた。

⑨(私Ⅱ句宮ハ)よにとかめあるはかりの(好色)心は なにこと
 にかはつかふらむ (私Ⅱ句宮ノ)ところせき身のほとこそ中
 くなるわさなりけれ とて まことにいとはしくさへおほ
 したり 「源氏物語・総角一六二五——」

⑩「……いくらもくか、らん人(Ⅱ子)のあらんは、厭はしがる
 べくもあらねど、月日のすぐるま、に、(貴女Ⅱ寢覚ノ懐妊中
 ノ容態ニ)胸ふたがりてこそ(私Ⅱ内大臣ハ)わびしくおほゆ
 れ」 「夜の寢覚・巻五三八四——」

⑪つねなき世は(私Ⅱ源氏ハ)大かたにもおもふ給へしりにしを
 めにちかくみ侍つるに(Ⅱ葵上死去)いとほしきことおほく 思
 給へみたれしも(貴女Ⅱ藤壺ノ)たひくの御せうそこになく
 さめ侍てなむ けふまでもとて 「源氏物語・葵三二八一——」

用例⑨～⑪は「状況」を発生源とする用例である。用例⑨では生
 まれつき決定づけられている身分が、用例⑩では子を持つことが、
 用例⑪では人の死が発生源となっている。これらは、いずれも人の
 力では左右できない天為であり、それを受けた主体は「いとはし」

を発している。

このように「状況」を発生源とする用例は、全体の八割強を占め
 ているが、「状況」以外を発生源とする用例も少数ながら存在して
 いる。「表2」より、発生源を「状況」としない用例は、次に示し
 た用例⑫～⑮の五例である。

⑫二人御帳の後に居隠れたるを、(深酔ノ道長ハ)取り拂はせ給
 ひて、二人ながら捕へすあさせ給へり。「和歌一つ宛仕うまつ
 れ、さらばゆるさむ」とのたまはず。(私Ⅱ紫式部ハ)いとほ
 しく恐ろしければきこゆ。「紫式部日記・八八——九」

⑬「……(故老関白トノ結婚ヲ)命もたえつばかりいみじかりし
 を、たゞ、「さだすぎたる人(Ⅱ故老関白)のいとほしきか」と
 のみ(私Ⅱ父入道ハ)心えて、(娘Ⅱ寢覚ヲ)いひ恥ぢしめき
 こえしを、いかにわびしと思ひけん。……」 「夜の寢覚・巻五三
 四四——」

⑭(葵上死後)今は(貴女Ⅱ若紫ヲ)とたえなくみたてまつるへ
 ければ(私Ⅱ源氏ヲ)いとほしうさへやおほされむと(若
 紫ニ)かたらひきこえ給を(乳母ノ)少納言はうれしときく
 物から 「源氏物語・葵三一九——〇」

⑮(浜松中納言ハ)えもいはぬ堂のめでたき ……中略…(尼姫君
 ニ)たてまつり給はん事をおほし急ぎて ……中略… 女(Ⅱ尼

姫君) も しばしこそまばゆくかたはらいたきすまると、いと
はしくわりなくおぼされしか (浜松中納言物語・巻二二五五

一五)

⑬ (寢覚ノ) もてなしなどは、鶯の羽風もいとほしきまで、たを

くとあえかに、やはらぎなまめいて [夜の寢覚・巻三二〇

六一二)

用例⑫は最高権力者であり紫式部の雇主でもある道長から、用例
⑬は娘の結婚に決定権を有する父親から、用例⑭は保護者である源
氏から、用例⑮は庇護者である浜松中納言からの要因である。また
用例⑯は「鶯の羽風」にすら耐えられないとする寢覚のかよわざを
表わす比喩での使用である。これらの用例は、天為以外を発生源と
しながらも、主体が要因を一方的に押し付けられ、逃れられないと
いう点において天為に準ずるものといえる。このことより「いとほ
し」の発生源は、天為もしくは天為に準ずるもののみであることが
わかる。

用例⑰⑱の検討より、「いとほし」は、主体にはあらがえない
要因を受けて発生する心情であることがわかる。

さらに、「いとほし」の発生源が天為であることに関連して、次
の用例⑲⑳に着目したい。

⑲ (私||柏木ガ) なにのつみども (父大臣ハ) おほしよらぬに

：中略：まことにさる御しう(女三宮)の(私||柏木ノ)身
にそひたるならば いとほしき身をひきかへ やむことなくな

りぬへけれ [源氏物語・柏木二三〇一四]

⑳ うつし人にてたにむくつけかりし人(六条御息所)の御けはひ
の まして世かはりあやしきもの、さまになりたまへらむをお
ほしやるに(源氏ハ) いと心うければ ；中略： 女の身はみ
なおなしつみふかきもとるそかし となへての世中いとほし
く [源氏物語・若菜下一一八九一七]

用例⑲は、病に伏す柏木が死を思う場面であり、用例⑳は、紫上
に憑いた物怪の正体が六条御息所であると源氏が知る場面である。
これらの用例には、「いとほし」に関連して「つみ」という語がみ
られる。そこで、「いとほし」と罪の意識の關係性に着目する。

用例⑲では、女三宮との不義密通を犯した柏木が罪の意識を抱い
ている。この場面の前後に柏木は、「神仏をまかこたむ方なきはこ
れみなさるへきにこそはあらめ」(柏木二三七一二)、「いかなるむか
しのちぎりにていとかることしも心にしみけむ」(柏木二三三一二)
と、女三宮との密通を宿世すまへに關わるものとみている。また用例⑳で
は、執念深い六条御息所の物怪から、宿命的に女性が持つとされて
いた「つみふか」さに源氏は思いをはせている。

また、以下の例では罪という語を伴わないが、主体の心中には罪の意識が存在するとみられる。

⑭弁のおもと(Ⅱ女房)に(薫ハ)かたらひ給て (大君ノ病平癒ノ)みす法ともはしむへきことの給 (大君ハ)いとみくるし
くことさらにもいとほしき身をととき、給へと (源氏物語・
総角一六四七—三)

⑮(寢覚病臥等ア)いみじく心のみだれつる、日ごろの事どもな
ど(姉ガ)語りきこえ給にも、(寢覚ハ)むねふたがる心地す
れば、「なを世にながらへては、かくのみ苦しかるべき心のう
ちを、のこさずもがな」とぞ、いとほしく思さる。「夜の寢
覚・巻二一四三—一」

用例⑯は、大君が病臥している場面である。この場面に至るまで
に、「さるもの思ひにします つみなどいとふか、らぬさきにい
かでなくならむ」(総角一六四—一四)、「この世にはいさ、か思ひ
なくさむかたなくて すきぬへき身ともなりけり」(総角一六四—一八)
と、大君は考えており、罪や宿世の意識に関連すると思われる。

用例⑰は、姉婿大納言の子を秘密裏に出産した寢覚が、死を願う
場面である。姉の結婚以前に結んだ思いがけない契であるため不義
密通とはいえないものの、姉への後ろめたい思いに「むねふたが

る」寢覚には、罪の意識が存するものと思われる。そして、大納言
との契から発するこれら一連の騒動を、寢覚は「かく言ひさはがる
れど、人に似ず憂かりける前の世の契しらる、節よりほかに、あや
まつ事ありとも、わが心にはおほえ給はねば」(巻二一五八—一三)
とし、宿世によるものとしている。

用例⑱⑲⑳の検討より、主体の罪の意識の背後には宿世に対する
意識がみられ、「いとほし」という心情の背景には宿世に対する意
識が存在していることがわかる。

また、用例㉑㉒のように、世に対する無常の意識を背景として
も「いとほし」は発せられている。

⑳(人ハ)よのなかりそめのこと、おもひとり いとはしき
心のつきそむる事も わかみにうれへあるとき なへての世もう
らめしう思ひしるはしめありてなん道心もおこるわさなめるを
(源氏物語・橋姫一五一七—一六)

㉑つねなき世は(私Ⅱ源氏ハ)大かたにもおもふ給へしりにしを
めにちかくみ侍つる(Ⅱ葵上死去)に いとはしきことおほく
思給へみたれしも (源氏物語・葵三二八—七)

㉒さためなきよといひなからも さしていとほしきことなき人の
さはやかにそむきはなる、も (源氏物語・鈴虫二三〇—一四)

以上の検討より、「いとほし」は宿世に対する意識や世に対する無常の意識を背景として用いられる語であるといえる。

三一二 「うとまし」について

次に、「うとまし」の発生源に関して検討を行なう。

〔表3〕より、「うとまし」の発生源は〈他者〉が最も高い割合を示し、その他の発生源に関しても用例がみとめられた。

⑭ いまは と (私 三 院 院 方) いはさらんかきりは (氷ヲ) おき

たまふな とて (尚侍二) もたせきこえさせたまて … 中略：

まことにかたのくろむまでこそ もちたまひたりけれ ざりと

もしはしそあらんとおほししに あはれさすきてうとましくこ

そおほへしか とそ院 (三 院 院 方) はおほせられる 「大鏡・

太政大臣兼家一三六一五」

⑮ (落葉宮方) おはしましつきたれは 殿 (一 条 宮) のうちかな

しけもなく 人けおほくてあらぬさまなり 御くるまよせてお

り給ふを (落葉宮ハ) さらなるさと、おほえす うとまし

ううたておほさるれば とみにもおり給はす 「源氏物語・夕

霧一三五八一四」

⑯ (八宮死後) けふまでなからへて… 中略：心うくもすきにけ

るひかすかな と (中ノ君ハ) おほすに… 中略：やうくか

うおきむられなとしはへるか けにかきりありけるにこそと

おほゆるも うとましう心うくて と (中ノ君ガ) らうたけな

るさまになきしほれておはするも いと心くるし 「源氏物

語・権本一五六四—二」

⑰ (六条御息所ハ) 御そなともた、けしのかにしみかへりたるあ

やしさに 御ゆるすまいり 御そきかへなとし給て心みたまへ

と 猶おなしやうにのみあれは わか身なからたにうとまし

うおほさる、に 「源氏物語・葵三〇〇—一三」

用例⑭は〈他者〉を発生源とする用例であり、三条院が戯れに、氷を持つことを尚侍に命じた場面である。主体三条院の「ざりともしはしそあらん」という予測とは異なる尚侍の行為が要因となっている。用例⑮は〈環境〉の用例であり、母后の葬儀のため自邸を離れていた落葉宮が、夕霧の待ちかまえる一条宮に戻った場面である。以前とは異なる邸の様子から、主体落葉宮は「さらなるさととおほえ」られないという違和感を抱いている。用例⑯は〈状況〉の用例であり、父八宮の死後、中の君が悲嘆に暮れる場面である。中の君は、悲嘆のあまり死まで思うが、月日の経過とともに「おきむられなと」し始める。自身の気持ちとは裏腹な現状に対して「うとまし」としている。用例⑰は〈内界〉の用例であり、六条御息所が身体に染みついた芥子の香を不審に思う場面である。主体六条御

息所は「わが身」を「うとまし」としている。「わが身ながらだに」という表現より、「うとまし」においては、主体自身は本来対象としては設定されない存在であると推察される。我身だが我身ではなく、別個の存在のようにみなされており、主体の意識から離れていることが要因となっている。

以上の検討より、「うとまし」は、主体の意識から隔たることを要因として発せられる心情であることがわかる。なお、「うとまし」において「他者」の用例数が最も多いことは、主体が社会生活を営む上で他者との関わりが避けられないことに起因するものと考えられる。

四、「いとほし」「うとまし」における

嫌悪の程度差

最後に、二語における嫌悪の程度差に関して検討を行なう。検討に際しては、主体の対象回避の方法に関する差異に着目する。これは、主体が示す対象回避の態度に関する差異が、主体の嫌悪の程度差を端的に反映しているものと推測されるためである。

対象回避の具体的記述を有する用例における、回避対象と回避方法を一覧したものが「表4」である。

「表4」より、回避方法の具体的記述を有する用例の割合は、「うとまし」よりも「いとほし」が高い傾向にあることが看取できる。また、「いとほし」の主体は、死または出家によってのみ対象を回

〔表4〕回避対象と回避方法

各語 回避対象と回避方法		いとほし	うとまし
		現世	死
俗世	出家	13	1
世間	山奥		2
他者	他場所		4
	不服従		3
	心的離反		5
合計		17 (56.7)	15 (17.0)

(注) 表中の数値は用例数、()内は全用例数中に占める、該当用例数の%

避しているが、「うとまし」の主体は、出家による回避が一例のみ確認できるものの、山奥に赴くなど、死や出家以外の方法により対象を回避する傾向にあることがわかる。

⑳ (落葉宮八) ひるまもなくおほしなけき いのちさへ心にかな
はすと いとはしういみしうおほす さふらふ人々も よろつに
ものかなしうおもひまとへり (源氏物語・夕霧一三四三―三七)

㉑ さためなきよといひなからも さしていとほしきことなき人の
さはやかにそむきはなるも ありかたう心やすかるへき程に
つけてたに をのつからおもひか、つらふほたしのみ侍るを

〔源氏物語・鈴虫一三〇一―一四〕

用例⑳は「いとほし」の用例である。用例㉔は、母御息所の亡き後、落葉宮が死を望む場面である。用例㉕は、出家について源氏が語る場面である。これらは、死や出家により主体が現世や俗世から離脱するため、再び主体と対象の関係が結ばれて元に戻ることは不可能である。そのため主体は、対象との関係を完全に断絶することを目指しているといえる。このことは、「いとほし」の要因が天為や天為に準ずるものであり、宿世や世の無常に対する意識にも関わることで無関係ではないであろう。要因に対して無力であることから生じる諦念や失望は、主体と対象との関係を希薄化する方向へむかわせると推測される。

また用例㉖では、寢覚が老閨白との結婚を「命もたえつばかりいみじ」く嘆いており、「逃げかくれ、髪をそざおとしなど」したかもしれない可能性に触れている。結婚に対する寢覚の強い拒否は、「いとほし」により表わされた嫌悪感が非常に強いことを示している。

㉔「…(故老閨白トノ結婚ヲ)命もたえつばかりいみじかりしを、たゞ、「さだすぎたる人(故老閨白)のいとほしきか」とのみ(私父入道ハ)心えて、(娘ノ寢覚ヲ)いひ恥ぢしめきこえしを、いかにわびしと思ひけん。そのまゝに逃げかくれ、髪をそざおとしなどもせず、身ひとつをこがしまさり…」〔夜

の寢覚・巻5三四四—1〕

「死や出家が対象回避の方法である「いとほし」に対して、「うとまし」では、それら以外の方法により回避が行なわれる傾向があり、回避方法も多様である。

㉓(寢覚ハ)わが御心にも、「帝ノ懸想ヲ」憂く、うとましと、にはかにきほい出給にし百敷なれば」と、(参内ヲ)思しもかけぬまゝに、大貳の北の方・少将などを、(故閨白娘ノ内侍督ノ許へ)たちかはりつ、さぶらはせ給。〔夜の寢覚・巻5三八二—五〕

㉔(匂宮トノ結婚ヲ)さまゝにおほしかまへけるを、いろにもいたし給はさりけるよと(中ノ君ハ)うとましくつらくあね宮(大君)をは思きこえ給て、めもみあはせたまつり給はす。〔源氏物語・総角一六二〇—五〕

㉕(女房達ガ大君ヲ)ひきうこかしつばかり(薫トノ結婚ニ関シテ)きこえあへるも(大君ハ)いと心うくうとましくて、うせられ給はす。〔源氏物語・総角一六〇四—四〕

用例㉓の主体寢覚は、帝の懸想から逃れるために宮中から自邸に退出した。用例㉔の主体中の君は、匂宮との契は姉の計略によるものと誤解して「めもみあはせ」ない。用例㉕の主体大君は、薫との結婚に対する女房達の熱心な勧めに従わず、無視している。これら

「うとまし」の主体は、回避という方法により対象を拒否しているが、諦念から回避を行なう「いとはし」とは異なり、消極的な抵抗としての回避といえる。これが端的に表われているのが、本論冒頭にも提示した、藤壺が出家を決意した場面において「うとまし」が使用される用例^{③④}である。これは、「うとまし」において主体が出家という回避方法をとる唯一の用例である。

③④院(桐壺院)のおほしの給はせしさまの　なのめならざりしを
(藤壺ハ) おほしいつるに　(桐壺院崩御後ハ) よろつのこと
ありしにあらすかはりゆく世にこそあめれ　戚夫人のみけむ
ぬのやうにはあらすとも　かならず人わらへなる事はあり
ぬへき身にこそあめれなと　(藤壺ハ) 世のうとましくすくしか
たうおほざるれば　そむきなむことをおほしとるに　〔源氏物
語・賢木三五四―八〕

桐壺院崩御後、藤壺は弘徽殿側から圧迫され、実子春宮の地位も危ぶまれるようになる。春宮の安泰を願う藤壺は、熟慮の末出家を決意する。出家を対象回避の方法とする「いとはし」の用例と同様に、「世」を回避対象としながらも、「戚夫人のみけむめ」「人わらへなるべき事はありぬ」と、弘徽殿側からの人為的な仕打ちを要因として、藤壺は現状を天為によるものとはとらえてい

ないと思われる。そのため、藤壺の出家は諦念によるものではなく、消極的ながら弘徽殿側に対抗するためと考えられる。

それでは、「いとはし」のように死や出家という回避方法による「うとまし」の主体と対象との関係性はどのようなものであるうか。

③⑤「…(姫君ノ容貌ハ)まことにうとましかるべきさまなれど、いと清げに氣高う、わづらはしきげぞ異なるべき。あな口惜し。

：中略：かばかりなるさまを」と(垣間見男ハ)思す。〔堤

中納言物語・虫めづる姫君三八二―一五〕

③⑥いみじう心づくしに、もの思ひわびさせんと、あやにくに(私ハ)寢覚ト内大臣ヲむすび置きけんつらさも、うとましからぬにもあらず。：中略：(内大臣ヲ)なのめならずおほえつるは、おほるけならず染みにける心にこそ　〔夜の寢覚・巻3二二
八一―四〕

③⑦(紫上ハ)おもてうちあかみて　あやしう　つねにかやうなるすち(嫉妬)のたまひつくる心のほとこそ　われなからうとましけれ　ものにくみはいつならふへきにか　と(源氏二)あし
たまへは　〔源氏物語・濤標四九二―二〕

③⑧(飛鳥井女君誘拐未遂事件犯人ノ)威儀師は昔もせねば、「浅ましく、かゝる心のありける」と、うとましく(女君乳母ハ)

思ひながら、「さすがにたちまちに、(威儀師ニ)疎まれんこと
は、世にあらんもいかゞ」と思ゆれば、「狭衣物語・巻一七二

— 11 —

用例⑤は、男が虫めづる姫君を垣間見した場面である。姫君が素顔のままという異様さは、男には「うとまし」と見えたが、「いと清げに氣高う」「かばかりなるさま」であると、美点にも言及している。用例⑥は、内大臣との関係について寢覚が思い巡らす場面である。寢覚は、内大臣との「あやにくにむすび置」かれた関係を「うとまし」としながらも、内大臣の存在は心底に「おほるけならず染み」ている。用例⑦は、欠点である嫉妬心を源氏から指摘された紫上が恥じる場面である。「うとまし」い嫉妬心は、「われながら」という表現から分かるように自分自身であるため、回避することとは困難である。そのため紫上は、嫉妬心に対して気持ちの上で目をもむけ、回避していると推察される。用例⑧は、飛鳥井女君誘拐未遂事件の後、犯人である威儀師との今後の関係について女君の乳母が思案する場面である。乳母は、信頼を裏切った威儀師を「うとまし」と思いながらも、経済的な後見者であることから、今後の関係を断ち切れない状況にある。

これらの用例より、「うとまし」の主体は、対象を嫌悪しながら一方で認める部分もあるなど、対象という存在に対して全否定はし

ていないことがわかる。対象との関係を完全に断絶する「いとまし」とは異なり、「うとまし」の主体と対象との関係は不完全な断絶状態にあるといえ、今後の復旧可能性を残存させている。

そして、「うとまし」における嫌悪感は、主体と対象との関係が不完全な断絶にとどまることから、完全な関係断絶へと向かう「いとまし」ほどの強さはないものと思われる。

五、おわりに

以上、「いとまし」「うとまし」に関して分析をすすめてきた。分析の結果、「いとまし」は、宿世に対する意識や世の無常に対する意識を背景とする抗えない要因に対して諦念を抱いた主体が、回避により対象との関係を完全に断ち切ろうとする、強い嫌悪の心情を表わしているといえる。一方「うとまし」は、主体の意識から隔たる要因に対して、主体は消極的抵抗として回避により対象との関係の断絶を目指す、完全には断ち切れない、という嫌悪の心情を表わしているといえる。

この結果をふまえ、本論冒頭に提示した社会的不遇から出家を志す源氏と藤壺の用例について改めて検討する。「いとまし」の主体源氏は、社会的不遇の現状を悲観して諦念を抱き、出家により世との関係を断ち切ろうとしている。しかし「うとまし」の主体藤壺は、社会的不遇は弘徽殿側から人為的にもたらされたものとし、こ

れに対して出家という消極的方法により抵抗し関係を断とうとするが、実子春宮に対しては関係が断ち切れない。このように各主体は、桐壺院崩御後における社会的不遇という同様の状況下にありながら、不遇の原因に対する認識や世との関係において差異をみせている。藤壺の出家決意の場面において「うとまし」が用いられたことは、春宮庇護に対する藤壺の深慮や、藤壺が出家後も俗世と無関係ではないられない状態にあり続けることを暗に示していると考えられる。

本稿においては、嫌悪の心情形容詞「いとはし」「うとまし」を対象として分析を行なったが、嫌悪の心情を表わした形容詞はこの二語以外にも存在している。これらの個々の語に対する分析や分析結果をふまえた心情形容詞語彙体系における位置づけ等は、今後の課題である。

〔注〕

(注1) 心理学において「嫌悪」は、「感情の最も基本的な次元の一つとして快—不快が考えられるが、そのうちの不快感を引き起こす対象を避けようとする行動に伴う」と考えられる心的状態」(有斐閣『心理学辞典』「嫌悪」の項)とされる。ただし、感情の基本次元を示した Schlosberg の感情の三次元モデル「快・不快、注目・拒否、緊張・睡眠」において「嫌悪」は、「不快」／「拒否」の枠内に入っている。現在、心情全体における個々の心情の位置づけが必ずしも厳密には明らかになっていない段階にあるため、本論では「嫌悪」を広くとらえている Schlosberg の三次元モデルに従った。

(注2) 調査した文献は以下の通りである。

『九本対照竹取翁物語語彙索引 索引編』笠間書院／『壬左日記総索引』桜楓社／『平中物語総索引』初音書房／『落窪物語総索引』明治書院／『多武峯少将物語 本文及び総索引』明治書院／『伊勢物語総索引』明治書院／『改訂新版 かげろふ日記総索引』風間書院／『算物語 校本及び総索引』笠間書院／『宇津保物語 本文と索引』笠間書院／『大和物語語彙索引』笠間書院／『和泉式部日記総索引』武蔵野書院／『校本 枕草子』古典文庫／『新校本 枕草子』笠間書院／『源氏物語大成』中央公論社／『紫式部日記用語索引』日本文学振興会／『堤中納言物語総索引』白帝社／『夜の寝覚総索引』明治書院／『更級日記総索引』武蔵野書院／『濱松中納言物語総索引』武蔵野書院／『狭衣物語語彙索引』笠間書院／『大鏡の研究 上巻 本文篇』桜楓社／『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集／『とりかへばや物語総索引』笠間書院

『表1』に掲げたもの以外には用例が存在しなかった。
資料中の用例の出典は、『源氏物語』「大鏡」『とりかへばや』(以上、索引本文篇、『枕草子』(新校本)、『紫式部日記』(岩波文庫)、『讃岐典侍日記』(新編日本古典文学全集)、その他は、日本古典文学大系による。

(注3) 和歌では、八代集において、「いとはし」六例(後拾二、新古四)、『うとまし』一例(金葉)が確認できる。以下、参考として『新日本古典文学大系』より引用し記しておく。

「いとはし」

桜花咲かば散りなんと思ふよりかかねても風のいとはしきかな

〔後拾八二〕

願はしきわが命さへ行く人の帰らんまでと惜しくなりぬる

〔後拾四七五〕

厭ひてもなをいとはしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮

〔新古二六二〇〕

われながら心のはてを知らぬかな捨てられぬ世の又いとはしき

〔新古二八六六〕

なに事にとまる心のありければさらにも又世のいとはしき

〔新古二八三二〕

あひみても峰にわかる、白雲のかゝるこの世のいとはしき哉

〔新古二九五八〕

〔うとまし〕

うとましや木の下の陰の忘れ水いくらの人の影を見つらん

〔金葉六八九〕

なお、本論文の対象文献内で「いとほし」「うとまし」が和歌中に使用された用例は存在しない。

(注4) 「いとほし」の用例に関して、他本との比較の結果から誤写とみられる用例が「蜻蛉日記」に一例、また、周辺の本文脱落に伴い不審とされる用例が「宇津保物語」に一例、確認できる。これらは分析対象から除外した。

(注5) 本論において、心情を発する主体者を「心情主体者」と呼ぶ。

(注6) 望ましさの点から要因は、「望ましい／望ましくない」に二分できる。

心情を「快／不快」により二分することが通説となっているが、判別に迷う心情形容詞(例、うらやまし)が存在するため、私に設定した。構文的観点から心情形容詞述語文における要因等に着目した論に、吉田浩史「感情形容詞述語の関係成分について―源氏物語にみられる「うれし」の場合―」『大妻国文』25(一九九四・三)他、田中牧

郎「源氏物語のウレシとカナシ 情意形容詞の統語情報の整理」『語彙・語法の新研究』佐藤武義編 明治書院(一九九・九)他がある。吉田氏は「感情誘発句」「状況説明句」、田中氏は「機縁」「前提」、「誘因」という用語を用いている。

(注8) 「従属的立場」という語は、身分や社会的地位の上下関係に関わるもののみと考えられやすいが、本論ではこれに限定せず、場面における主導権の有無に関わる優劣などに関しても広く取り上げた。

(注9) 「内界」へ「他者」へ「環境」へ「状況」の各発生源の例を提示しておく。

「わが心も(宮中) たち馴れゆくよ。」「(発生源・内界) 峯にかくれし」と (元恋・人方) 言ひつる返事を、いかで答へいでつるぞ」と、(主体) 新参女房(ハ) うとましく思ひつゝけて

〔夜の寝覚・巻一八二一六〕

〔北ノ方(ハ) 心たかひとはいひなから (灰掛ノ行為(ハ) なを(発生源・他者) せめてつらしうみしらぬ人の御有さまなりやと (主体) 鬚黒(ハ) つまはしきせられ うとましくなりて (源氏物語・真木柱九四六一―四) 〕

〔桐壺院死後(発生源・状況) おほかたのよにつけてさへ(わづらはしうおほしみたる、ことのみまされば (主体) 源氏(ハ) もの心ほそく 世中なへていとほしうおほしならる、に さすかなることおほかり (源氏物語・花散里三八七―三) 〕

〔月やうくいて、 (末摘花邸(ハ) (発生源・環境) あれたるまかきのほどうとましく (主体) 源氏(ハ) うちな

かめ給に (大輔命婦(ハ) きむそ、のかされて (末摘花(ハ) ほのかにかきならし給 (源氏物語・末摘花二二―一五) 〕

(注10) 宿世とは「前世において結んだ因縁」であり「現世で受ける果報」である。そして「本来人間の努力によって、変更が可能なものであるが、物語では、多くは人々がこれに拘束されて、逃れられないように思っている」ため、本論では逃れられないものとして宿世を扱う。「内、重松信弘『源氏物語の仏教思想』」第三節 宿世の思想「平楽寺書店（一九六七・八）より引用

(注11) 「いとほし」「うとまし」の動詞形である「いとふ」「うとむ」の差異に関して、「いとふ」は行為性が強く、「うとむ」：中略：は感情性が強い、「いとふ」は避ける行為をし、「うとむ」は心の距離を置く、という中川正美氏の指摘がある。「いとほし」の回避方法が「うとまし」よりも具体的に記述される傾向にあること、また「うとまし」に「心的離反」という回避がみられること等より、形容詞形においても、動詞形に関する中川氏の指摘と同様の傾向にあるといえる。「内、中川正美『源氏物語文体攷 形容詞語彙から』」「うんず」と「いとふ」「うとむ」和泉書院（一九九九・一〇）より引用

〔主要参考文献〕注に掲げたものを除く

国立国語研究所・西尾寅弥 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英

出版（一九七二・三）

阪倉篤義 『日本語の語源』 講談社現代新書（一九七八・九）

土田昭司、竹村和久編 『対人行動学研究シリーズ4 感情と行動・認知・

生理』 誠信書房（一九九六・九）

飛田良文・浅田秀子 『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版（一九九一・七）

松浦照子・片岡信二・安部清哉 『平安文学における形容詞対照語彙表』

『フェリス女学院大学文学部紀要』26（一九九一・三）

宮地敦子 『対義語と類義語―「にくむ」とその類縁の語―』『身心語彙の

史的研究』 明治書院（一九七九・一二）

〔付記〕 本稿は、国語学会中国四国支部学会第四十七回大会（平成十三年十

一月十日 於広島大学）における口頭発表にもとづいたものである。

発表の席上及び終了後に諸先生方より御教示を賜った。記して心よ

りお礼申し上げる。